

6. 両生類

【選定・評価方法の概要】

東京都には2目6科10属15種の在来両生類の生息が確認されている。今回の改定では、15種すべてを検討対象種とした。なお、東京都に生息するヒダサンショウウオの集団は、2018年に独立種ヒガシヒダサンショウウオとして記載されたので今回の改定では種名を変更した。文献調査および実地調査に基づいて、検討対象種の生息状況を把握するように努めた。その際、分布域の特定や個体群密度の推定が可能な種については、定量的要件を用い、それが難しい種では定性的要件で評価を行った。

【選定・評価結果の概要】

サンショウウオ目では前回(2010年版)同様、東京都に生息する4種すべてが本レッドリストの掲載種となった。カエル目についても東京都に生息している在来カエル類11種すべてが掲載種となった。

今回の改定で、前回より生息状況が改善した種もしくは地域はなかった。水田の減少、谷戸田の耕作放棄や乾燥化、アライグマやウシガエルなどの外来種による捕食、トウキョウサンショウウオで顕著な販売目的の採集、アズマヒキガエルで確認された他亜種との交雑など、様々な要因によって東京都の両生類の生息状況は悪化しており、前回よりランクを上げなければならなかった種は5種9地域となった。

本改定において定量的要件で評価できたのはトウキョウサンショウウオのみであった。本種については最近20年間のモニタリングデータから30年間(3世代時間)の個体群衰退を推定した。その結果、30年間(3世代時間)で繁殖地の50%弱が消失し、さらに残った繁殖地でも個体群サイズの縮小が進み、東京都全体で総産卵メスの個体数は65%程減少したと推定された。同じように止水で繁殖するアカハライモリでも個体群サイズの縮小の状況はトウキョウサンショウウオと変わらないと推定される。一方、西多摩の山地溪流で繁殖するハコネサンショウウオでは一部の地域を除き大きな変化はないように見えるが、ヒガシヒダサンショウウオについてはインターネットを経由した販売目的の採集や写真撮影のための観察会による環境かく乱が個体群の存続を危うくさせる要因となりつつある。なお、絶滅危惧IA類と判定されたのはトウキョウサンショウウオ(北多摩)とアカハライモリ(区部)の2種2地域であった。

カエル目では、溪流性のカジカガエルやタゴガエルなどのランクは前回と同じとなった。一方、水田の減少傾向が続いていることを受けて、地域によっては水田に依存するトウキョウダルマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエルのランクが上がった。また、前回、区部のみ準絶滅危惧とされたアズマヒキガエルは、ニホンヒキガエルとの交雑や繁殖地の減少を受けて、すべての地域でランクが上がることになった。

以下、地域区分ごとの評価について概観する。区部は水田や自然湿地が極端に少なく、

両生類の生息地は河川敷や水辺公園などに限定されるが、その何れもが小規模で孤立している。また、前回改定の際に指摘されたウシガエルの分布拡大は継続しており、さらに国内外来種であるヌマガエルの侵入定着が新たに確認され、在来種に悪影響を及ぼしている。前回と評価が変わったのは、ニホンヒキガエルとの交雑が明らかとなったアズマヒキガエルだけである。しかし、それ以外の種の生息状況が厳しいことには変わりなく、特にツチガエルとサンショウウオ目で唯一区部に生息するアカハライモリについては、信頼できる生息情報がなく、すでに絶滅した可能性も否定できない。

北多摩は区部に次いで生息環境が悪化している。狭山丘陵にはトウキョウサンショウウオが現在も生息するが、最近数年間で特に激しく衰退し、30年間に96%減少したと推定され、東京都内でも本種の絶滅が最も危惧される地域である。カエル類では、ニホンヒキガエルとの交雑が確認されたアズマヒキガエルの評価が前回のランク外から絶滅危惧Ⅱ類に変更された。また、トウキョウダルマガエルは、既知の生息地が僅かとなったために絶滅危惧ⅠA類となった。

南多摩には良好な丘陵地が残されているが、水田の減少、休耕田の増加は続いている。サンショウウオ目の評価には変化がないが、八王子市西部のヒガシヒダサンショウウオの生息環境は現在良好な環境とは決して言えず、生息分布の縮小が続いている。特に高尾山周辺では最近30年間程生息情報がほとんどない。アズマヒキガエル以外のカエル類の評価は前回と同じとなった。アズマヒキガエルについては繁殖個体数の減少が著しい上、ニホンヒキガエルとの交雑も懸念されることから絶滅危惧Ⅱ類になった。

西多摩は今回の改定でランクが変更された種が多くなった。ハコネサンショウウオやナガレタゴガエルなどの山地性の両生類は前回と同じランクに留まった。ただし、ヒガシヒダサンショウウオは前回の準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類となった。一方、トウキョウサンショウウオのランクに変更はないものの、基準産地であるあきる野市・日の出町の丘陵部でも他地域と同様に谷戸田の乾燥化が進み、アライグマによる捕食、人による採集などで、30年間で本種の個体群が1/3に衰退したと推定された。カエル目ではニホンアカガエルが絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧ⅠB類へ、ヤマアカガエルが準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類へ、それぞれ引き上げられた。前回ランク外であったアズマヒキガエルは、繁殖地の消失が相次いでいるという報告を受けて、準絶滅危惧とした。

各地域区分の評価を総合的に検討し、東京都全体としての評価を行った結果、サンショウウオ目では、絶滅危惧ⅠB類2種、絶滅危惧Ⅱ類1種、準絶滅危惧1種、カエル目では、絶滅危惧ⅠB類2種、絶滅危惧Ⅱ類2種、準絶滅危惧7種となった。すなわち、東京都に生息する両生類はすべて準絶滅危惧以上と評価された。

(福山 欣司・草野 保)

両生類（本土部）

【記号凡例】

[EX]絶滅 [EW]野生絶滅 [CR]絶滅危惧ⅠA類 [EN]絶滅危惧ⅠB類
 [CR+EN]絶滅危惧Ⅰ類 [VU]絶滅危惧Ⅱ類 [NT]準絶滅危惧 [DD]情報不足
 [*]留意種(選定理由①～⑥はP.11参照) [○]ランク外 [－]データ無し [・]非分布

和名	学名	東京都ランク					環境省 ランク 2020	備考
		区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部		
有尾目	CAUDATA							
サンショウウオ科	Hynobiidae							
トウキョウサンショウウオ	<i>Hynobius tokyoensis</i>	・	CR	EN	EN	EN	VU	
ヒガシヒダサンショウウオ	<i>Hynobius fossigenus</i>	・	・	EN	VU	VU	VU	1
ハコネサンショウウオ	<i>Onychodactylus japonicus</i>	・	・	・	NT	NT		
イモリ科	Salamandridae							
アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i>	CR	EN	EN	EN	EN	NT	
無尾目	ANURA							
ヒキガエル科	Bufonidae							
アズマヒキガエル	<i>Bufo japonicus formosus</i>	VU	VU	VU	NT	NT		
アマガエル科	Hylidae							
ニホンアマガエル	<i>Dryophytes japonicus</i>	EN	VU	VU	NT	NT		2
アカガエル科	Ranidae							
タゴガエル	<i>Rana tagoi tagoi</i>	・	・	VU	NT	NT		
ナガレタゴガエル	<i>Rana sakuraii</i>	・	・	VU	NT	NT		
ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>	EN	EN	EN	EN	EN		
ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i>	・	EN	EN	VU	VU		
ツチガエル	<i>Glandirana rugosa</i>	CR	CR	CR	VU	VU		3
トウキョウダルマガエル	<i>Pelophylax porosus porosus</i>	CR	CR	EN	EN	EN	NT	4
アオガエル科	Rhacophoridae							
シュレーゲルアオガエル	<i>Zhangixalus schlegelii</i>	CR	VU	VU	NT	NT		5
モリアオガエル	<i>Zhangixalus arboreus</i>	・	NT	NT	NT	NT		6
カジカガエル	<i>Buergeria buergeri</i>	・	VU	VU	NT	NT		

和名、学名、配列は「日本爬虫両棲類学会，2020. 日本産爬虫両生類標準和名リスト(2020年11月16日版). 日本爬虫両棲類学会」に準拠した。

【備考】

番号2～6の種は、最近の研究結果に従って学名を変更した。

- 1: 東京都に生息するヒダサンショウウオの集団は、2018年に独立種ヒガシヒダサンショウウオとして記載されたので本改定では和名および学名を変更した。前回記載の和名および学名はヒダサンショウウオ *Hynobius kimurae* である。
- 2: 前回記載の学名は *Hyla japonica* である。
- 3: 前回記載の学名は *Rana rugosa* である。
- 4: 前回記載の学名は *Rana porosa porosa* である。
- 5: 前回記載の学名は *Rhacophorus schlegelii* である。
- 6: 前回記載の学名は *Rhacophorus arboreus* である。